論文の内容の要旨

論文題目　認知・行動的側面からみた抑うつと攻撃性の関連　ー攻撃の表出性に焦点をあてて

氏　名　上野　真弓

広域科学専攻　生命環境科学系

博士論文の背景と目的

うつ病は，病気の診断を受けていない健常者の抑うつとの間に連続性が仮定されていることから（e.g., 坂本・大野, 2005），うつ病の原因解明や治療法研究のために健常者を対象としたアナログ研究が盛んに行われている。本研究では健常者の抑うつをうつ病の前段階として捉え，研究を行った。

DSM-IV-TR（American Psychiatric Association, 2000）によると，うつ病の特徴として強い自責感，希死念慮，自殺企図などがあげられている。このことから，うつ病，抑うつの高い者は本来他者へ向けるはずの攻撃性が自分に向けられていると考えられてきた(e.g., Biaggio & Godwin, 1987)。しかしながら，うつ病者が他者に怒りを表した報告も成されており（e.g., Friedman, 1970；鈴木・安齋, 1999)，現在のところうつ病患者，健常者の抑うつを対象とした実証的研究において，「抑うつの高い者は自責的で攻撃もしない」ことを示す結果が一貫して得られているわけではない。臨床的にも抑うつと攻撃性の関連は指摘されていおり，最近ではうつ状態でありながら他責的で，慢性的に焦燥感が強い「非定型うつ」（e.g., Parker, Roy, Mitchell, Malhi, & Hadzi-Pavlovic, 2002; 横山, 2006; Chopra,

Bagby, Dickens, Kennedy, Ravindran, and Levitan, 2005）に代表されるような，うつ病のサブタイプが提唱されている。これらのことから，うつと攻撃性との関連はさらに複雑化していると考えられる。そこで，本研究では攻撃性の中でも特に認知的側面と行動的側面に焦点を絞り，それぞれの側面と抑うつとの関連を検討した。さらに，攻撃性を他者に見えるように表す表出性攻撃と，他者には見えないように怒りを心の中にとどめる不表出性攻撃という 2 種類に分けて考え（坂井・山崎, 2004），抑うつとの関連を明らかにし，さらには攻撃性を踏まえたうつ病治療への提案を行うことを目的とした。

博士論文の構成

本博士論文は 4 つの章と 7 つの研究から構成される（Table 1）。

Table 1　博士論文の構成

第 1 章　抑うつと攻撃性との関連	
	研究1　攻撃性の 4 側面との相関
	研究2　表出傾向との関連
第 2 章　抑うつと怒り表出に関わる信念	
	研究3　抑うつと怒り表出信念
	研究4　怒りの表出信念と表出傾向
第 3 章　抑うつと攻撃表出の方法	
	研究5　攻撃方法の分類
	研究6　抑うつ者の攻撃方法の検討
第 4 章　抑うつのサブタイプ	
	研究7　抑うつのサブタイプと攻撃性

第 1 章　抑うつと攻撃性との関連

第 1 章では，抑うつと攻撃性全体との間にどのような関連が見られるのかについて，攻撃性の強さと表出傾向を通して検討することを目的とした研究を行った。研究 1 では，抑うつと攻撃性全体との間の相関を確認し，抑うつ者はある程度強い攻撃性を持っていることを示した。また，抑うつ者は他者に対する敵意は高い一方で，それを表出できない傾向があることが示唆された。研究 2 では，抑うつと特性として見られる怒り表出傾向の関連について検討し，抑うつ者は怒りを表出しない傾向があるというよりも，怒りを他人に知られないように隠そうとする傾向が強く，隠した怒りを静めようとする傾向も低いことを明らかにした。これらの結果から，抑うつとは表出性攻撃よりも不表出性攻撃が強い関連を持っている可能性が示唆された。

第２章　抑うつと攻撃表出に関わる信念

第 2 章では攻撃性の認知的な側面に焦点をあてた研究を行った。研究３では自己記入式の尺度によって測定したこれらの信念と抑うつとの関連を検討し，抑うつ者は怒りを抑制することに対する信念よりも，怒りを表出することに対する信念を強く持っていることを明らかにした。さらに，怒りを表出することが自分にとって良くないことだという信念と，怒りを表出することが自分にとって良いことだという信念という，矛盾した 2 つの信念を強く持っている可能性が示唆された。研究４では研究３の結果から，怒りの表出と抑制に関する信念のうち，表出に関する信念のみを取り上げ，怒り表出に関する信念と怒り表出傾向と抑うつの関係を探索的に検討した。その結果，抑うつ者は「怒りを表出することはいいことだという信念を持ち，怒りを感じてもそれを解消したりしようとはしない」傾向と，「怒りを表出することは悪いことだという信念を持ち，他人に感じた怒りを絶対に見せないようにする」傾向を持っている可能性が示唆された。これらの結果から，抑うつと不表出性攻撃との関連には，怒りの抑制に関する信念ではなく表出に関する信念が影響を与えていることを明らかにしたといえる。

第３章　抑うつと攻撃表出の方法

第 3 章では，攻撃性の行動的側面に焦点をあてた研究を行った。研究５では，怒りを感じたあとに取られる対処行動をその性質によって分類することを試み，一般の大学生にとられやすい表出方法の分類を行ったところ，強い情動性をもち表出性攻撃の性質を強く示す行動群と情動性が弱く目標志向的な不表出性攻撃の性質を示す行動群という 2 つの因子に分類可能であることを示した。研究６ではこの２つの行動群と抑うつとの関連を検討し，抑うつ者は怒りを感じた際に，情動性が強く表出性攻撃の性質をもつ行動ではなく，情動性が弱く不表出性攻撃の性質をもつ行動を取りやすい傾向があることを示した。行動的な側面から検討しても，抑うつ者は不表出性攻撃との関連が強いことが示唆されたといえる。

第４章　抑うつのサブタイプ

第 4 章では尺度で測られる抑うつの強さという「量」ではなく，あらわれる特徴の違いという「質」に焦点を絞った研究を行った。研究７では抑うつのサブタイプに着目し，攻撃性との関連を検討した。その結果，抑うつ者の中にも対人関係により強く問題を抱えているグループと特にアパシーや全般的に落ち込んだ気持ちになりやすいグループという，特徴の異なるグループが存在することが示唆された。さらに，これらのグループは攻撃性の特徴にも違いがあり，対人関係に問題を抱えるグループは怒りを感じてもそれを主張しようとする傾向が非常に低く，その怒りを隠そうとする傾向が非常に高かったのに対し，落ち込んだ気持ちになりやすいグループは怒りを主張することに特別な抵抗を持たず，怒りを隠そうとする傾向もそれほど高くないという傾向が示唆された。このことから，抑うつ者の中にも，抑うつと攻撃性のそれぞれについて異なる特徴を持つグループが存在して

いることが明らかになった。

総合考察

本研究の結果から，（1）抑うつと攻撃性には関連があり，（2）特に表出性の攻撃とは関連がなく，不表出性の攻撃と関連が強いこと，（3）抑うつの中にも攻撃性の特徴が異なるグループがみられることが明らかになった。つまり，抑うつ者は認知的にも行動的にも，怒りを感じた際にその怒りを他人に知られないように隠す傾向をもっているが，抑うつ者の特徴の違いを踏まえると，攻撃性にも異なる特徴が見られる場合もあるということが示されたといえる。

この結果を踏まえて，攻撃性の一般モデル（Anderson & Bushman，2002）に抑うつの影響を仮定したモデルを提案した（Figure 1）。

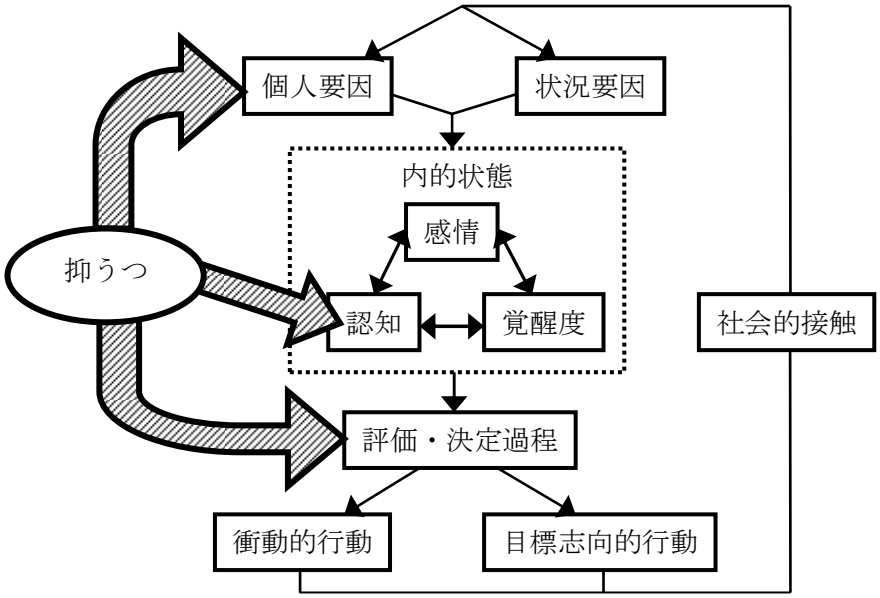

Figure 1 攻撃の一般モデル（Anderson & Bushman，2002）に抑うつの影響を仮定したモデル図。

本論文の結果から提案された Figure 1 のモデルでは，攻撃性のモデル内の個人要因とされる部分に抑うつが直接含まれると考えられる上，内的状態の認知と考えられる攻撃の表出に関する信念，取りやすい怒りの対処行動を決定する評価・決定過程部分に抑うつの影響が考えられている。さらに，行動の結果として得られる社会的接触によって，抑うつが強化されている可能性も考えられるが，このモデルについてはより詳細な検証が必要である。

また，本論文での議論から，攻撃性の信念・表出傾向・抑うつの関連には，「怒りの表出に関するポジティブな信念が強く，怒りを解消しようとしない傾向をもつことで抑うつに

つながる」というタイプと，「怒りの表出に関するネガティブな信念が強く，怒りを隠そうとする傾向をもつことで抑うつにつながる」というタイプの 2 種類がみられることが明らかになった。このことから，それぞれのタイプに対応するような介入手段を提案し，攻撃性という新しい視点からのうつ病へのアプローチの可能性を示唆した。

一方で，本論文ではうつ病患者ではなく，アナログ研究から得た結果を議論している。そのため，本論文で得られた結論がうつ病患者にも適用可能であるのかについては，今後更なる検証が必要であると考えられる。また，本論文で提案された介入法の例についての信頼性や妥当性，さらにはうつと攻撃性の因果関係についても，より詳細な検証が重ねられる必要性があると考えられる。